

五稜郭の歴史絵巻 函館野外劇

～歴史、文化、そしてまちづくり～

東出 洋幸

日本政策投資銀行函館事務所

1. 函館観光の新しい動き

開港都市はこだて。早くから外国文化を取り入れた異国情緒あるハイカラな街並みは、訪れる人を魅了している。

金森赤レンガ倉庫群に代表されるベイエリア、旧函館区公会堂、函館ハリストス正教会、旧イギリス領事館、函館中華会館、港を見下ろす坂道、北海道と本州の橋渡しをしてきた青函連絡船記念館摩周丸…。そして、函館山からの夜景。



函館山からの夜景(出所:函館市 HP)

このように歴史的資源が豊富な函館には、年間530万人の観光客が訪れている。その函館で新しい観光資源創出の動きが始まっている。

「はこだてクリスマスファンタジー」。毎年、カナダのハリファックス市から寄贈されている巨大なもみの木をクリスマスツリーとして飾り付け、周辺のベイエリアをライトアップする冬の函館を彩るイベントである。

次に「函館塩ラーメンサミット」。全国的なラーメンブームの中、百十余年もの歴史を持つ塩ラーメンに着目し、函館塩ラーメンによるまちおこしを行っている。

そして、「函館野外劇」。今回は、今年大幅にリニューアルし、さまざまな色彩を織り成す函館の新しい観光資源としての魅力を増した函館野外劇を紹介したい。

2. 函館野外劇とは

夏の夜、函館のまちに光が宿りはじめる。

五稜郭の水面に映る幻想的な光。神秘的な音。異次元の世界へと誘われる。

木の陰や空中、水際の物陰から踊り出る伝説の小人
コロボックル達。

黒船ペリーの来航、街中に溢れる異国の人々。

五稜郭完成、箱館戦争、新撰組土方歳三の最後。

やがて訪れる静寂。

このように幕末から明治の函館を彩る歴史絵巻、それが「函館野外劇」である。



開港当時のシーン(出所:市民創作 函館野外劇 HP)

(1) 野外劇の特徴

函館野外劇は、毎年7月下旬から8月上旬の金・土・日の夏の夜(19:30～21:00)に公演しており、その特徴は、次の3つが挙げられる。

- 五稜郭という恵まれたロケーション
- 照明や音響効果の素晴らしさ
- 数多くの歴史的事蹟



箱館戦争のシーン(出所:市民創作 函館野外劇 HP)

まずは、「五稜郭という恵まれたロケーション」。国の特別史跡である五稜郭は、箱館戦争(1869)の戦場であった。周囲を堀で囲まれ、神秘的な形状をした五稜の星。その五稜郭での公演は見るものに時空を超えたスペクタクルを与える。

次に、「照明や音響効果の素晴らしさ」。五稜郭に彩られるさまざまな光と音。その光と音の競演により幻想的

な雰囲気観客は誘われる。

そして、函館には「数多くの歴史的事蹟」がある。高田屋嘉兵衛。ペリー来航。箱館戦争…。野外劇は誰もが知っている出来事を題材とし、函館の歴史を紹介しているため、大変親しみやすい内容となっている。

これらの絶妙な調和が野外劇という歴史絵巻を彩り、観客を魅了しているのである。

(2) 誕生までの経緯

函館野外劇が誕生したきっかけは、フランス人フィリップ・グロード神父(1927～)の夢に始まる。

グロード神父の故郷であるフランスのル・ピディフ地方では、古城とその前庭を舞台とした大規模な野外劇を催している。この野外劇は、ボランティアを中心に運営され、毎年、多数の観光客が訪れる世界有数の演劇である。この野外劇の開催により街には人が溢れ、地域に賑わいが生まれた。ル・ピディフ地方では、野外劇は地域おこしに大いに貢献している。

「五稜郭という素晴らしいロケーションを生かし、函館のユニークで豊富な歴史的事実を野外劇として活用すべきだ。野外劇を函館でもぜひやってみたい。」

このグロード神父の言葉に端を発し、地元の有志が中心となり実施計画が練られていった。何もかも手探りの中で紆余曲折しながら準備は進められ、ついに昭和 63 年の第 1 回目の開演に至り、今年で 16 年目を迎えた。

函館野外劇の主な受賞歴

- 1987 年…ル・ピディフ(仏)野外劇財団と姉妹提携
- 1991 年…地域づくり表彰(国土庁長官賞)
- 1993 年…北海道地域づくり優良事例知事賞

- 1993年…サントリー地域文化賞
- 1997年…北海道ふるさと大賞 97
- 1997年…読売新聞社 97北の暮らし大賞

(3) 変化しつづける野外劇

函館野外劇では毎年シナリオや演出を見直し、魅力ある演劇を観客に提供しようとしている。また、野外劇を実際に鑑賞した外部識者からは、「歴史と浪漫のまち函館ならではの夏の風物詩であるだけでなく、新たな函館の文化観光資源となりうる。」など高い評価を得ている。このような状況の中、さらなるレベルアップのため、平成15年にプロの演出家により演出を見直し、シナリオを変える大幅なリニューアルを行った。ポイントは次の8つ

である。

- 野外劇の主役は函館の歴史であることを認識する
- 函館観光の目玉となるようにレベルアップする
- 特別史跡五稜郭を中心としたストーリーをつくる
- コロポックルを狂言回しとし、劇をスムーズにする
- シーンをシェイプアップし、全体にメリハリをつける
- 新テーマ曲をつくり、繰り返しアピールする
- エンターテインメント性を高める
- 市民に積極的に参加を促す



土方歳三のシーン

(出所:市民創作 函館野外劇 HP)

このように、函館野外劇は、ボランティアがつくる市民劇でありながら、目の肥えた観客にも満足してもらえる質の高い作品を目指し、変化しつづけている。

(4) NPOによる運営

函館野外劇は国内有数の屋外劇であり、その運営は特定非営利活動法人「市民創作『函館野外劇』の会」が担っている。

野外劇はキャスト、スタッフともに市民ボランティアによって構成されており、参加は個人の自由である。ボランティア活動に参加している人達は、暇を持て余して参加している訳ではないため、参加することが自分にとっていかに有益かというインセンティブを与え、今後野外劇を支えていく後継者を育成していくことが必要である。

その手段のひとつとして、次世代を担う人達に野外劇へ興味を持ってもらうため、市内の各中高校の演劇部を対象としたワークショップを行っている。本格的な演技指導が受けられるということもあり、参加した学生たちは、皆積極的に演劇の手法を学び、大好評であった。

また、市内の各種団体への参加要請も継続的に行っており、野外劇参加の裾野を着実に広げている。

3 まちづくりへのインパクト

(1) まちづくりと文化貢献

観客動員数は例年7,000人前後で推移している。一方、ボランティアの数は1回の公演で500人以上であり、年間10回の公演で延べ5,000人以上となっている。このように野外劇は多数のボランティアに支えられており、この地域のまちづくりや文化活動に大きく貢献している。

「野外劇は、あらゆる年齢層と多様な職域に亘る様々な技術・諸能力の発揮と総合によってはじめて成立する新形式の市民文化である。市民自らが生活する地域の歴史と文化的伝統を基盤とし、誰もがボランティアで

参加できる野外劇を構想したところに、この会の特徴的な独創性があったといえる。」(「国土庁地域づくり表彰事例集」から引用)

また、函館市教育委員会のふるさと学習の手引きに「子供たちが郷土愛と自立性を育む成長の場」として紹介されていることからわかるとおり、野外劇は地域に根付いた活動の場となっている。今後も、野外劇を続けていくことにより、地域のまちづくりや文化活動はさらに醸成されていくことであろう。

(2) 既存観光資源とのネットワークづくり

野外劇を文化振興というだけでなく、観光資源として捉え、函館の他の既存観光資源とネットワークをつくることも必要である。

よく知られているように、函館の観光名所は、函館山の麓に広がる西部地区を中心に存在しており、野外劇を上演している五稜郭地区はそこから少し離れている。

また、夜の上演であるため、函館観光の最大の売り物の1つである函館山からの夜景を望める時間帯と重複している。しかし、これらを有機的に結び付け野外劇に観

客が来るような仕掛けは可能であると考えられる。実際、修学旅行で函館を訪れる学校の中には、日中、西部地区を散策して函館の歴史を学び、さらに夜にその総まとめとして野外劇を鑑賞するところがあり、評判は上々であるという。

最近の観光には物見遊山的な観光スタイルばかりでなく、地域の歴史や文化を学ぶという質の高いスローな観光という需要もある。歴史と観劇という点に着目した高付加価値な観光を提供することにより、函館の魅力はさらにアップすることが期待される。



市電(出所:函館市 HP)

(3) 広報宣伝活動

また、広く野外劇を知ってもらうための広報宣伝活動も重要である。

「最近、旅行雑誌などに取り上げられることも多くなっているが、まだまだPR不足である。」と野外劇の会の輪島理事長代行が話すように、今までも新聞や雑誌への掲載依頼を行ってきたが、最近は大手旅行会社に観劇ツアーの実施を依頼したり、修学旅行生の受け入れを行うなど、野外劇を全国的に広めるために積極的にPR活動を行っている。野外劇を実際に鑑賞した観客の90%以上がその内容を高く評価している。やりかた次第で、今後も可能性は大きく広がっていくであろう。

(4) 観客の視点に立った運営

さらには、観客の視点に立った野外劇の運営が求められている。

「どのようにすれば観客が満足するか」や「観劇ツアー客などに対して雨で公演が延期になった場合の対応」など、これまで以上に観客の立場に立った運営が望まれる。

実際、観劇ツアーが雨天のため中止になった際の対応として、翌日に野外劇の舞台裏で即席説明会を実施したところ、ツアー客からは大好評だったという。

このように観光客の心を掴む対応が、野外劇の今後の発展に繋がっていくことであろう。

4 今後の発展に向けて

このように函館野外劇はひとつひとつ年輪を積み重ね、16年という歳月を経過してきた。運営にはさまざまな課題があるが、野外劇の会はさらなるレベルアップを目指し、工夫を重ねている。また、野外劇の舞台である五

稜郭には、幕末当時に実在した「箱館奉行所」が復元される計画があり、五稜郭や函館の歴史を紹介している
野外劇は、今後注目を浴びる機会が多くなり、その活動はさらに活性化するものと思われる。

北海道では、函館野外劇のほか、YOSAKOIソーラン祭りなど市民を巻き込んだ新しい活動が根付いてきて
おり、これらの「文化をテーマとしたまちづくり」は、地域の文化振興への貢献だけでなく、観光資源としての
意味合いを強めている。

函館港開港 150 周年。函館はまもなく記念すべき年を迎える。

野外劇で演じられているような開港当時の活気のある函館を取り戻すために、函館野外劇は今後も輝き続け
ることであろう。

【取材協力】 特定非営利活動法人「市民創作『函館野外劇』の会」

HP: <http://hakodate.to/yagaijeki/>

本稿は「日経研月報 第 306 号」(平成 15 年 12 月発行)に掲載されたものです。